



邪馬台国時代の王国群と纏向王宮

はしがき

西暦二三九年度の冬、倭使・難升米一行は魏都・洛陽にようやく到着し、魏都をめぐる幅約二〇メートル余の土城を見上げたことであろう。数日後には魏の皇帝・明帝に謁見し、ここに魏・倭の国交が開始された。

難升米たちは倭国を出発して六カ月余り、朝鮮半島西岸中央にある帯方郡庁で魏王朝への表敬訪問の趣旨を説明し、仲介を依頼し、数日滞在して水や食料の補給をおこない、帯方郡司の案内のもと洛陽へと向かったはずである。

二〇〇九年一月五日、奈良県の二上山麓に集った「ふたかみ史遊会」の一行は漢魏洛陽城に到着した。夕景のなかに土城が浮かぶ。まさに洛陽の時だった。ポプラ並木の向うに夕日が沈んでいった。

「ふたかみ史遊会」は、一九九二年四月にオープンした香芝市二上山博物館友の会として一九九三年に発足し、遺跡の見学会や邪馬台国シンポジウムなど多くの活動をしてきたが、おしくも二〇一七年に解散することとなった。

二上山博物館の入口には、洛陽付近から出土した西晋時代(二六五～三二六年)の武人俑をモデルにした等身大の像が立つ。なぜ武人俑なのか。それは市内の別所城山二号墳出土の四世紀の札甲さねよろいと似た甲を

伝洛陽出土の武人が着用しているからであった。博物館開館の前年に急遽北京に向かい、北京大学での土製の武人像に直面した。奈良県立橿原考古学研究所に留学していた同行の蘇哲さん（北京大学卒業、奈良県立橿原考古学研究所に留学）は、その武人像が三世紀の中国北方民族の顔をよくあらわしていると教えてくれた。帰国後、奈良市の石工、佐野勝治さんに依頼し、二上山産凝灰岩で石像を無償でつくっていただいた。

西晋初期の二六六年には倭国の使者が洛陽に派遣されているので、この石像は二上山博物館が始まる邪馬台国シンポジウムにふさわしい武人像となった。そして、博物館と「ふたかみ史遊会」が主催する二〇〇一年の第一回邪馬台国シンポジウムから二〇一七年の第一七回までの一七年間を洛陽の石人が見守ってくれることとなった。

一七回のシンポジウムでは、主に邪馬台国時代の周辺地域はどのようなかを探ってきた。今回、一七回のシンポジウムの資料集に寄稿した論考に加えて、関連する講演録をまとめ、三世紀の都市・纏向遺跡と邪馬台国論を一書とし、あらためて邪馬台国の問題に迫ってみた。

なお、本書の地域名は、飛鳥・奈良時代以降の旧国名を漢字表記のまま仮に使用している。弥生時代から古墳時代にかけての地域的特色が、現代の都道府県名より近いと感じられるからである。



二上山博物館の前に立つ武人像

邪馬台国時代の王国群と纏向王宮 ● 目次

I 邪馬台国時代の王国群 9

- 1 倭人は文字を使っていた 10
- 2 三、四世紀の祭殿―家屋文鏡の世界 14
- 3 近畿勢力はどうやって大陸や半島と交易したのか 20
- 4 住居からわかる海洋民の西部瀬戸内への進出 26
- 5 阿波・讃岐・播磨の連合はあったか 32
- 6 ホケノ山古墳の大壺は何に利用されたのか 38
- 7 二、三世紀の筑紫と大和を結ぶ太平洋航路 40
- 8 三世紀の大和と吉備の関係は？ 46
- 9 三世紀の三角関係―出雲・吉備・大和 52
- 10 丹・但・撰の紀年銘鏡 56
- 11 卑弥呼擁立を図った祭場か？―伊勢遺跡 62
- 12 独自の文化圏を保った近江 64

- 13 二世紀の東海の祭祀 68
- 14 二、三世紀の東海と近畿 72
- 15 角丸戦争のゆくえ 78
- 16 二、三世紀の日本海と甲斐・信濃 82
- 17 三、四世紀の会津と大和 90
- 18 土器のみち 98
- 19 三、四世紀の豪族居館 104
- 20 墳墓の伝播 108
- 附 対馬国と一支国への旅 112

II 纏向王宮への道のり 119

- 纏向遺跡は邪馬台国の候補地となるか 120
- 纏向王宮への道のり 142
- 纏向王宮と箸中山古墳 154
- 大和と筑紫の陵寝制と銅鏡破砕儀礼 174

纏向王宮から磯城・磐余の大王宮へ 182

III 邪馬台国論 185

古代に見え隠れする邪馬台国 186

卑弥呼を「共立」した国々 192

卑弥呼と男弟―三世紀のヒメ・ヒコ体制 218

邪馬台国時代再考 236

あとがき―漢魏洛陽城への憧憬 255

参考文献 259

I 邪馬台国時代の王国群

1 倭人は文字を使っていた

弥生時代以来、日本列島各地に中国商人たちがつくった植民地が存在する、という一九七七年の岡田英弘氏の説は強烈だった。当時、弥生時代の日本列島にその痕跡がある可能性を私はまったく考えていなかった。しかし、武末純一氏は北部九州をはじめ、ごく少量ながら近畿にも楽浪系遺物があることを指摘している。武末氏は、旧伊都国の領域となる福岡県糸島市三雲番上遺跡では五〇メートルほどの小さな発掘区内から楽浪土器が坏・壺・大甕・鉢など器種セットをそろえて五〇点ほど出土しており、楽浪郡の人びとが来ていた可能性があり、おそらく楽浪系官人が伊都国中枢にいて文字によって朝鮮半島との交易や外交交渉の一端を担っていたとする。後漢・光武帝から金印を受けた「委奴国」の外交も当然、文書外交であり、文字を読み、書く官人が存在していたはずである。

日本列島の文字資料は弥生中期に伝来した中国鏡にある吉祥句が最初であろう。当時、倭人はそれを文字と認識していないし、認識しても読めなかった、と考えられている。しかし、福岡県須玖王墓や三雲王墓には三〇〜四〇面の文字のある漢鏡が副葬されており、入手した王が外交を担当する漢人に鏡に描かれている図柄や文字らしきものについて質問し、次の機会には「この吉祥句のある鏡を」という注文があったにちがいない。つまり、鏡にある文字が倭人の文字への関心をひろめ、福岡県糸島市三雲甕棺の「竟」をはじめ、三重県津市大城遺跡の二世紀後半の「奉」などにあらわれているように思われる。では、弥生時代に文字があったかという点、奈良県の唐古・鍵遺跡などからは、弥生時代後期の記号

のついた長頸壺などが出土しているが、この記号は後続する三世紀の纏向式土器には刻印されることなく消滅する。纏向式期の土器には長頸壺もない。

地域を離れても共通した表記をおこなっている一、二世紀（弥生時代後期）の記号がその共通性のゆえに文字に発展する要素が強いのだとすれば、その中枢地である近畿中部（奈良・大阪）でなぜ突然に記号は消滅したのか。考えられるのは、このときに漢字が導入され、文字に発展する可能性を秘めた記号は消滅した、ということである。このように考えると、記号が消滅した地域に文字が早く導入され、記号が残る地域への文字の導入は遅いとみられる。記号が消える時期は、女王卑弥呼の登場の時期とほぼ同時であり、女王を中心とした倭国の外交中枢地と関連しているのではないだろうか。

武末氏は、韓国の李健茂氏の見解を紹介し、前一世紀の茶戸里一号墓に副葬されていた筆五本に注目している。そして倭人も文字を読めただけでなく、書けたのではないかと指摘した。

奈良県桜井市大福遺跡の三世紀前半の木棺の底から編物の管が検出されている。管は径〇・八センチ、長さ八センチで両端に何かを着装した痕跡はない。後漢の『論衡』には「一尺の筆」とあり、漢の一尺は二三センチで、大福遺跡の例は一致しない。したがって筆軸とは断定できない。しかし、大福遺跡の管は、茶戸里一号墓の筆と同様に棺の下から出土しているので、筆である可能性を保留しておきたい。

弥生時代の文字使用をさらに決定づけたのは、二〇一六年三月に発表された「伊都国」三雲・井原遺跡の一、二世紀の硯片である。四・三×六センチの片面が研磨されている板石で木製の台の上に固定して使用したらしい。同様の硯片は島根県松江市和田山遺跡にもあり、日本海沿岸の国々と楽浪郡との文書外交が確実さを増してきた。また近年、福岡県筑前町薬師ノ上遺跡から完全な形の硯が出土した。

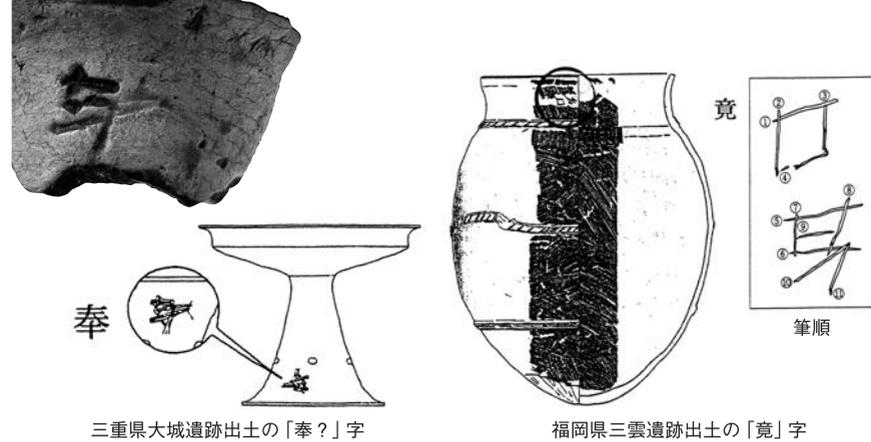
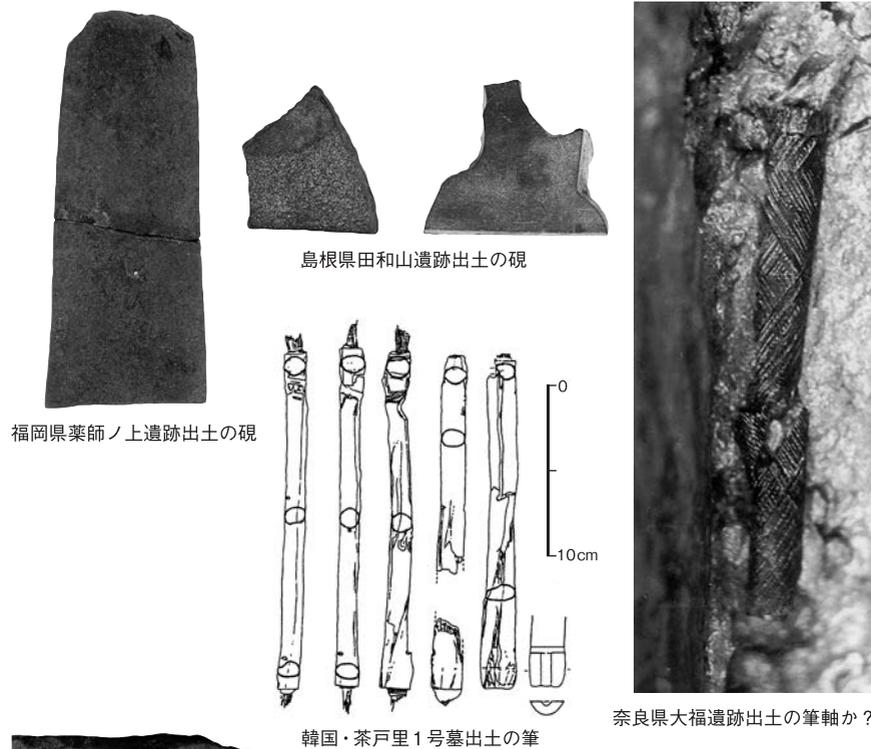


図2 弥生時代の筆・硯、文字

直線	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	
	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	
	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	
	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	A ₆	
曲線	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄			
	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄			
	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄			
	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄			
点	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄			
	D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	D ₅	D ₆	D ₇
	E ₁	E ₂					
	F ₁	F ₂	F ₃				
点	G ₁	G ₂	G ₃	G ₄	G ₅	G ₆	G ₇
	H ₁	H ₂	H ₃				
	I ₁	I ₂	I ₃	I ₄	I ₅	I ₆	I ₇
	J ₁	J ₂	J ₃	J ₄	J ₅	J ₆	J ₇

弥生時代の記号体系



図1 奈良県唐古・鍵遺跡出土記号のついた土器